

## 守江治夫さんを憶う

工学院大学生産機械工学科 矢部 眞

この3月10日、本学会会員 守江治夫さん（日科技連常務取締役）が亡くなられた。筆者より4歳も若いのに…と残念でならない。

守江さんはもともと日科技連育ちの方である。当然のことだが、上司には忠実な部下、同僚には信頼できる仲間、部下・後輩には良い上司・先輩だったと聞いている。そればかりか、組織を異にする人びとに対しても友情の厚い人だった。

筆者は昭和31年4月からの半年間、日科技連第4回OR教育コースに生徒として出席した。その時、面倒を見てくれた担当職員の1人が守江さんだった。後述するような事情で友人となったが、以来優に4半世紀を越えている。ふり返ってみると、筆者のほうが世話になりっぱなしだったという気がする。

当時は敗戦後10年を過ぎていたが、経済的に豊かではなかった。日科技連は東京駅八重洲口にある旧大阪商船ビル内にあった。冷房もなく、近くのホテルで騒音もひどかった。にもかかわらず、ORフィーバーというか熱気でムンムンしていたことは、今の人には想像もつかない。このコースは昭和29年に第1回が開かれたそうだが、先生も生徒も若かった。参考書もなかった。大学で教えてもいなかった、もちろん本学会も生まれてはいない。QCが一応定着してきていたが壁にぶつかりかけてきたためだという人も生徒の中にいた。ともかく企業から派遣されて半年間、ORを学ばなければ…という使命感をもつ人が多かったようだ。

コース終了後、“もっと学びたい。アフタ・ケアも考えてほしい”という気持ちの有志が集まった。小人数ならコースで質問できない点も聞けようというものがある。たぶん顔が広いというためだろう。筆者が世話

人の1人となり守江さんにいろいろ骨を折ってもらって“OR研究懇話会”が生まれた。第6回生も熱心で“ORワーカー連合会”が作られた。守江さんから、“毎回できるのは良いが、面倒を見きれないからまとめてほしい”というご注文で、約1年かけて、“OR連合研究会”という形になった。この会の幹事で後にOR学会の役員になられた方も少なくない。

国鉄本社ORセンター勤務中、OR関係の新技术導入について守江さんのお世話になった。筆者が仏国留学を終えて帰国後ある理由でくさっていた時、守江さんがわざわざ一席設けてくれて、“竜馬のような人だ。〈竜馬が行く〉を読め”とすすめてくれた。一読。まったく似ていなくてがっかりしたが、以来司馬ファンの1人となり恩恵を蒙っている。

筆者は国鉄退職後、新日鐵に4年間、足利工大経営工学科主任（4年間）などを経て、昭和52年4月より本学にきている。この年7月先輩のご芳志で、はからずもIFORS（トロント）参加。帰国後の話、守江さんも訪中視察団（QC）に幹事で参加された由、“先方はOR関係者を招きたいといっている。幹事で行きませんか？”とすすめられて大感激。とても行けるような環境ではなかったが…。その時、タバコ好きの守江さんが禁煙していた！一時入院もされたと聞いた。昨秋再入院とか。お見舞に上らなくてはと思いつつながら公務多忙で果たせなかった。せめて果汁なども…と考えたが手遅れ。まったく申し訳ないことをした。守江さんは最後まで学会会員として縁の下の力持ちに徹された。こういう会員が学会を支えていると思う。こういう会員の存在を忘れてはなるまい。 合掌

積しています。会員諸兄の家庭生活・研究・仕事にも少なからぬ影響をもたらすでしょう。

（電子通信学会・都市学会会員・陸士59期）

松下電子工業半導体R&DセンターCAD部 上島 安正

カリフォルニア大学パークレイ校でORを学んで帰国後、集積回路のためのCADソフト開発の仕事に従事して、早くも2年近くが過ぎました。超LSIと呼ばれる

集積度のきわめて高い集積回路が実用化されつつある現在、その設計に対するコンピュータの応用は欠かせないものです。各種シミュレーションまたはマスクレイアウトなど自動設計検証システムの確立が急がれます。そこで、ORとの関連という目でわれわれのCADを見るとすれば、マスク設計の最適化などにおいて、グラフ理論、動的計画法といった理論手法が大いに力を発揮すると考えられます。ORを学んだ者として、半導体のCADとOR理論の接点に立って仕事を続けていければと思っています。